

# とまきの玉手箱



第90回

博物館からのメッセージ

## 「かたち」から読む古文書

### 「老中奉書」の場合

「老中奉書」とは、江戸幕府の政治を統括した老中から大名らに出された書類で、相手に対して、將軍からの許可や御礼の気持ちを伝えました。彦根藩主井伊家には約5千点もの老中奉書が残されており、私たちにさまざまなことを教えてくれます。ここでは形式から何が分かるか読み解いていきます。

のは、彦根城の修築願いに対する許可、参勤時期の承諾などの許可可や、幕府の重要行事の際に將軍に献上品を差し上げたことに対する御礼など、一部の場合に限られていました。

式でした。藩主が彦根に帰っている最中に彦根から江戸へ出した將軍への御機嫌伺いや祝儀言上、さまざまな献上品に対する御礼といった内容のものです。老中1人の署名が全員が署名しているかの違いは、その内容の重要度によりました。重要なものは連名で、そうでない形式的なものには1人だけが署名しました。また、紙の使い方の異なる奉書もあります。最も一般的な老中奉書は、奉書紙と呼ばれる縦約40cm、横約55cmの紙を横

幕府の公式文書である老中奉書は非常に定型化されており、形式のわずかな違いが何かを表現しています。まず、差出人の書き方を見てみると、写真1と写真2では老中の署名は2行にわたって書かれており、1行目には苗字(写真1の1人目は阿部)と通称(伊予守)、2行目に小さく実名(正右)と花押(サイン)が書かれます。ただ、写真1と写真2では署名の数異なります。写真1のように老中全員の署名がある



写真1 彦根城石垣の修復を許可する老中奉書



写真2 徳川刑部卿婚姻祝儀を献上した御礼の老中奉書



写真3 年頭の祝儀を献上した御礼の老中奉書

半分に折り、折り目を下にして書く「折紙」という形式で記されています。また、数量的には少ないですが、紙全体を使って書く「豎紙」という形式の奉書もあります。この形式では、折り畳んだ時に表となる部分に直接差出・宛名が記されており、上部でひねって封をしています。別の紙で包まれた「折紙」よりも簡略化された封式であることが分かります。その他、紙の大きさや差出人の署名からも「折紙」の奉書より略式であることが分かります。略式な「豎紙」の老中奉書を受け取ったのは、いずれも井伊家の世継ぎでした。写真3は井伊直幸の世継ぎ直豊が年始の祝儀を献上した御礼として老中松平右近将監武元から出されたものです。このとき直豊は世継ぎながら江戸城で行われる行事に参加することを認められており、大名並に献上品を差し出しましたが、その礼状は大名より格の低い様式だったのです。

このように書類の書き方にまで格式がつけられたのは、江戸時代が身分や家柄の格差が厳密な社会だったからです。その格差を具体的に示すものは数多くありましたが、その一つが受け取る書類の様式でした。

(彦根城博物館学芸員 野田浩二) 写真の史料は、いずれも彦根城博物館蔵

写真の史料は彦根城博物館常設展示「古文書が語る世界」において公開中(2月23日(月)まで)